

Title	現代高校生にとっての「高校」
Author(s)	秦, 政春; 片山, 悠樹; 西田, 亜希子
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 30 P.114-P.142
Issue Date	2004-02
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/5276
DOI	10.18910/5276
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

現代高校生にとっての「高校」

秦 山 政 春
片 山 悠 樹
西 田 亜希子

現代高校生にとっての「高校」

秦 政春⁽¹⁾
片山 悠樹⁽¹⁾
西田亜希子⁽¹⁾

1. 高校教育の変容と高校格差

高校ほど、質的にも量的にも変化の激しい学校段階はない。戦後の昭和23年度に新制高等学校が発足した。当初は、旧制の中等学校から新制の高校に移行したということもあり、まだ「エリート」的な色彩を色濃く帯びていた。それから10年ほど経過した昭和33年の高校進学率はほぼ50%である。この進学率は、ちょうど現在の大学進学率に匹敵する。このことは、当時から40年ほどのあいだに、国民の学歴レベルがワン・ランク上がったということになる。そのことを考えるだけでも、この40年あまりのあいだに、高校がいかに急激な変容をとげてきたか容易に想像できる。

なかでも、とくに「高度経済成長」の時期以降の変化はかなり大きなものであった。ちょうどベビーブームによって生徒が急増したことに加えて、経済成長に対応するというかたちで高校教育に対する社会的要請も強まった。たとえば、産業構造の変化に対応するための工業関係の学校・学科の増設、農業自営者のための農業高校の整備・拡充といったものである。そして、このころから高校教育は確実に「大衆化」の方向にむかいはじめた。これにともなって生じてきたのが、「高校格差」である。

その後、昭和50年代に入って高校進学率は90%を超え、高校教育はさらに進んで「ユニバーサル化」の段階になる。この段階になると、「高校格差」の存在はより明確なものとなった。しかも、それは学業成績や大学進学率による「格差」というだけではなく、生徒たちの意識や行動においても明らかな「格差」が生じるようになった。「高校格差」のなかで上位の高校の生徒は学校文化に対して適応的、肯定的であるのに対して、下位の高校の生徒は不適応的、否定的、ないしは逸脱的、反抗的といった具合である。有利な立場にいる生徒たちはより有利に、不利な立場にいる生徒たちはより不利な状況が累積するという構図である。

こうした「高校格差」に基づく構造は、生徒たちの将来的な社会的・職業的地位獲得に関連づけて、一般に「トラッキング・システム」と呼ばれてきた。簡単にいってしまえば、「高校格差」に応じて将来の社会的・職業的地位にまで続くトラックが用意されており、中学生のときの成績によってそれぞれの「格差」(トラック)に振り分けられ

(1) 大阪大学大学院人間科学研究科(臨床教育学講座 教育技術開発学研究分野)

た生徒たちは、それ以降そのトラックを走り続けるしかないというものである。それにしても、この構造は生徒たちにとってはもちろんのこと、高校教師にとってもきわめて厳しい。いうまでもなく、それぞれの高校においてどんな教育実践をすとかということ以上に、「高校格差」のなかでの位置（ランク）に規定されたシステムだからである。

ところが、こうした完璧なまでの「トラッキング・システム」にも、最近いささか陰りがみえてきた。むろん、この背景には「大学全入時代」ともいえるような大学進学率の急増といった事態がある。このことは、それだけ大学に入りやすくなったと理解してよい。そうなれば、「トラッキング・システム」が完全に崩れてしまうことはないにしても、かなり「ゆるやかな構造」になることは当然である。

そして、進学に関する「トラッキング・システム」が「ゆるやかな構造」になってきたとすれば、高校生の意識・行動に関する「トラッキング」にも変化が生じてくることは容易に想像できる。本論文では、こうした問題意識に基づいて、高校生の意識・行動のなかでもとくに変化がいちじりしいと考えられる非行・問題行動を取り上げ、これに対する意識や行動の実態について実証的に明らかにしたいと考えている。なかでも、とくに現代高校生の非行・問題行動の経験について、いま「高校格差」という「トラッキング」はどのように関与しているのか。かりに、非行・問題行動に関しても「トラッキング」の影響が弱体化しているとすれば、いったいどのような要因がこれに関与しているのか。そして、こうした分析結果に基づいて、高校教育に関する今後の教育課題について検討することにしたい。

2. 本論文での研究枠組み

2.1 トラッキング構造の弱体化

すでに若干ふれたように、1970年代後半以降、高校生の進路や行動様式といったものは、トラッキング構造という枠組みで多くが説明されてきた。トラッキングとは「複線型学校システムのように法制的に生徒の進路を限定するというのではないにしても、実質的にはどのコース（学校）に入るかによってその後の進路選択の機会と範囲が限定される」（藤田 1980）という人材の選抜・配分機能を指す。しかし、トラッキングの機能はそれだけでなく、学業成績を基準に類似した生徒を同一トラックに集め、同一的な集団へと再編するため、それぞれのトラックでふさわしい価値観や行動様式を身につける社会化機能がともなう。生徒文化に着目し、向学校的文化・反(脱)学校的文化が高校ランクにより分化していることを実証した研究は、トラッキングに選抜・配分機能だけでなく、社会化機能がともなっていることを表わしている（米川 1978）。

こうした選抜・配分機能と社会化機能の密接な結びつきを理解する概念として、地位欲求不満説（耳塚 1980）が用いられた。それは、選抜・配分機能の過程で成功していない生徒は成人後の配分される地位の低さを予期し、欲求不満を増大させ、社会や学校

に対して反抗的な態度を形成するという図式が描かれた。単純化すれば、業績主義的競争のなかで生徒たちは「勝者」/「敗者」を認識し、行動様式の分化がおこるのである。高校生の非行・問題行動も、このような枠組みで理解され、実証されてきた(秦 1984)。

では、この2つの機能の密接な結びつきは、普遍性があるものであろうか。「良い学校」「良い会社」「良い人生」という教育歴と成人後の地位との関連を表わす学歴獲得の目標が高校生に共有されている条件のもとで、地位欲求不満説が有効性をもち、トラッキングによる選抜・配分機能と社会化機能との結びつきは成立可能となる。業績主義的競争過程で「敗者」となった生徒たちによる、校内暴力やツッパリスタイルなどの反抗的態度が多くみられた1970年代から1980年代は、当時の高校生が学歴獲得の目標を共有していたことをしめしているであろう。

しかし、近年の大学入学の容易化、個性重視のメッセージ、また成功による満足と失敗に対する不安も少ないという豊かな社会での認識の変化により、学歴獲得の競争に高校生が動員されにくくなっていると考えられる。この状況変化は、地位欲求不満説にみられた非行・問題行動のメカニズムとは異なる状況を生み出していると考えられる。

近年の高校研究では、卒業後の進路においては高校格差がいまだにみられるが、高校生の学歴意識は低下し、学校適応や生活様式においては高校格差がみえにくくなっていると指摘している(樋田他 2000・尾嶋 2001)。これらの指摘から、現代高校生においては学歴獲得という目標の共有が低下し、たとえ卒業後の進路の違いがあっても、その違いが「勝者」/「敗者」の認識を生み出さないと考えられる。そのため、これまで高校生の行動様式に影響を与えていたトラッキング構造は弱体化しているのではないだろうか。しかし、トラッキング構造の影響がまったくなくなったとは考えられない。そこで、高校ランクや学歴意識と、非行・問題行動との関係をみていく。

2.2 高校への「親和性」、学業成績、そして青年文化の肥大

トラッキング構造の影響が弱体化しているならば、いったいどのような要因の影響が肥大しているのだろうか。その要因としては、以下の3つが考えられる。

1点目は、高校生による在学する高校への意味づけである。トラッキング構造の影響が強い時期では、自己の成績が学校名により可視的になるため、高校生は在学する高校から自分への社会的評価を意識していた。しかし、トラッキング構造の弱体化にともない、現代高校生は在学する高校から社会的評価を意識するよりも、在学する高校を日常生活の場として意識する比重が高まると考えられる。つまり、高校生活に充実感を感じているか、または疎外感を感じているかという、高校生による高校への意味づけの影響が肥大すると考えられる。そこで、高校生による在学する高校への意味づけという観点から非行・問題行動を考察する。意味づけとは、個人がある対象にどのような意味をみいだすかという個人的な戦略ではあるが、個人の嗜好や性向に左右されるような概念ではない。それは、学校や家庭または地域社会などの社会組織に規定され、その結果とし

て表出する概念である。本論文では、高校生による在学する高校への意味づけを高校への「親和性」と名づける。

ここでいう高校への親和性とは、ハーシのボンド理論を応用し、他者に抱く愛着・尊敬であるアタッチメントと、合法的な活動への参加というインボルブメントの2つを取り上げ、1つにした概念である。また、在学する高校への意味づけと想定しているため、アタッチメントに関しては、学校のなかで重要な他者である教師に抱く愛着に、インボルブメントに関しては、学校での当番の仕事や宿題などの学校生活の諸活動への参加に着目する（Hirschi 1969=1995）。高校への親和性に、ハーシのボンド理論を応用した理由は、ボンド理論は個人が「下からの作用として」社会に結びつくという個人を軸とした概念であり、我々が想定する概念に近いためである。また、アタッチメントとインボルブメントを高校への親和性と1つにしたのは、アタッチメントとインボルブメントの双方とも、学校内での教育実践に直接的に関係しているためである。

2点目は、学業成績である。トラッキング構造の影響が強い時期は、中学校から高校への輪切り選抜により生じる、高校間の学業成績水準の格差に焦点が当てられてきた。しかし、トラッキング構造の弱体化にともない、高校間の学業成績水準の格差が現代高校生に与える影響は弱まると考えられる。では、現代高校生は学業成績から影響を受けないのだろうか。学校は授業を中心に組織され、生徒は常に学業成績により評価されているため、学業成績はこれまでとは異なるかたちで現代高校生にも影響を与えるのではないか。つまり、学校内における学業成績の影響が肥大すると考えられる。そこで、学校内の学業成績と非行・問題行動との関係をみていく。

3点目は青年文化であるが、ここでは、高校生の生徒文化の変化から青年文化の影響の肥大についてふれる。1970年代から1980年代の高校生は、学校と家庭で一日のほとんどの時間を過ごし、学校外の活動が活発でなく、「ひよわな若者文化」（Rohlen 1983=1988）と形容されていたように、学校文化と青年文化とのあいだに境界が存在していた。この境界は、2つの条件のもとで成立していた。1つ目は、高校生が「享乐的」な青年文化に染まらぬため、学校は厳しい生徒指導をしたように、青年文化の侵略を阻止する学校文化が形成されていた点。2つ目は、当時の高校生は学歴意識の共有が高く、「将来のため」というロジックに一定の意味をもっていたため、青年文化に対して禁欲的な学校文化にコミットしていた点。この時期は2つの条件が揃っており、境界が存在していたと考えられる。そのため、当時の高校生の生徒文化は、青年文化から隔離された学校文化内で形成されており、青年文化が高校生に与える影響はあまりなかったと考えられる。

しかし、トラッキング構造の弱体化、さらに「将来のため」というロジックが揺らぎをみせるなかで、現代高校生は青年文化に対して禁欲的である必要性を感じず、ためらいなく青年文化にコミットできるようになる。そのため、青年文化が学校文化に侵略し、2つの文化の境界が曖昧になりつつある。近年のインターネットや携帯電話などの急速

な普及や、高校生の消費活動へのコミットの増大という現象は、このことを表わしているといえよう。このような状況下で、現代高校生の生徒文化は、青年文化から隔離された学校文化内で形成されるのではなく、青年文化と絶えず融合するかたちで形成されているだろう。このように、生徒文化の変化を考慮すると、青年文化が現代高校生に与える影響は肥大していると考えられ、青年文化から現代高校生の非行・問題行動を捉える必要がある。

2.3 使用したデータと分析の手続き

本論文で使用するデータは、2001年に山梨県・大阪府・奈良県・福岡県・長崎県・鹿児島県の高校1・2年生を対象に実施された「高校生の生活に関する調査」である。調査対象校はすべて公立高校で、サンプル数は3069人である。調査方法は、各高校を通じた質問紙による集合調査法で、各高校の教師によって配布、実施された。学科・コースは多様であるため、授業内容に応じ、普通科、英語科、農業系学科、産業系学科に分け、その結果、普通科74.1%、英語科3.4%、農業系学科4.4%、産業系学科18.1%となった。

非行・問題行動は高校生の自己申告によるものである。本論文では、非行・問題行動を行なっている、行なっていないという独立的な面からではなく、後に述べる「経験に関するパターン」と「意識と行為に関する組み合わせ」によって典型的に捉えていく。

非行・問題行動の分析に用いる指標は、さきに述べた枠組みに沿って、高校ランク、学歴意識、高校への親和性、学校内の学業成績、青年文化の5つとする。高校ランクは、進路別の実績を基準に、便宜的に「A」～「E」の5段階を設定した。具体的には、ランクAの高校は東大・京大などを含む国立大学に多く進学している、いわゆる地域の名門校である。それに対してランクEの高校は、かつてのいわゆる職業高校を中心とした高校で、3割ほどが多様な進学機関へと進学しているが、専門学校などへ進学する割合が高く、大学・短大などの正規の高等教育機関への進学は1割ほどである。学歴意識は、学歴による成功欲求をもとに、「もしも、経済条件や成績などすべてが関係なかったとしたら、あなたはどのような進路に進みますか」と「『有名な学校の卒業生から優先して社員を採用する』という会社があります。あなたがこの会社の社長になったとしたら、この方針を続けていくことに対してどのように思いますか」の質問項目を指標として用いる。前者では、高校生に希望する学歴を、「四年制大学 短期大学 専門学校・各種学校 就職 家事手伝い フリーター その他」の8項目から回答してもらい、それをもとに「大学・短大 専門学校・各種学校 就職 その他」の4つにカテゴリー分けをした。また後者では、有名な学校が就職に有利であることに「賛成できる やや賛成できる あまり賛成できない まったく賛成できない」の4段階から回答してもらった。高校への親和性は、アタッチメントに関しては「(高校で)好きな先生がたくさんいる」・「先生に信頼されていますか」、インボルブメントに関しては「給食・掃除・日直など、当番の仕事をきちんとする」・「宿題をいつもやってくる」を用い、高校への親和性の指

標とする。それぞれを「あてはまる ややあてはまる あまりあてはまらない まったくあてはまらない」の4段階から回答してもらった。学校内の学業成績は、高校での成績を「上 中の上 中 中の下 下」の5段階から回答してもらい、学校内の学業成績の指標とする。青年文化の指標は「自分の着る服について流行を気にしますか」と「髪型を変えるとき、流行を気にしますか」を用いる。

3．現代高校生の非行・問題行動に関する状況

非行・問題行動を考察するにあたり、「経験」に注目すると、いつ非行・問題行動を経験し、どのくらいの期間その行為を継続的に経験しているかというように、経験に関するパターンは多様に考えられる。しかし、小・中・高校の学校段階を基準に分けると、どの学校段階で非行・問題行動を経験し、どの学校段階まで継続的に経験しているかというように、一定のパターンに分けることが可能となる。また、非行・問題行動に対する「意識」と、実際に非行・問題行動を行なっているか否かという「行動」の2つの面を組み合わせることにより一定の組み合わせができる。

そこで本章では、非行・問題行動の経験に関するパターンと、非行・問題行動の意識と行動に関する組み合わせから、現代高校生の非行・問題行動の状況を典型的に捉えることにしたい。

3.1 それぞれの非行・問題行動に関する相互関連

ある行為が非行・問題行動であるか否かの線引きには曖昧さが入り込む。そのためまずは、いかなる行為を非行・問題行動として扱うのかについてふれていきたい。たとえば、本調査の項目にある、シンナーを吸う、無免許運転という行為は、法律や条例などの法的基準により非行・問題行動と位置づけられ、その基準に異論を申し立てることはあまりない。いっぽうで、髪を染める、ピアスをするという行為は、「服装の乱れは心の乱れ」という常套句にみられるように、青少年の健全な発達に望ましい価値や特性から逸脱しているという価値的判断から、非行行為とはいわないまでも、問題行動と位置づけられる可能性が高い。しかし、これらの行為は、法的基準からは非行・問題行動と位置づけられることはなく、また個人の価値や表現の自由に属する問題であるため、非行・問題行動と位置づけることに対して、異論を申し立てることは多くなる。

なぜ、非行・問題行動の判断をめぐりこのような混乱が生じるのであろうか。それは、ある1つの行為を独立的に捉え、その行為内容を一定の価値基準から非行・問題行動と判断するためである。そこで本論文では、どのような行為を非行・問題行動として扱うのかということに関して、かならずしも明確な価値基準を立てず、1つの行為を経験する高校生が他の行為を重複して経験するという、行為の相関関係からアプローチする。

では実際に、どのような行為が相関関係にあるのかを、それぞれの行為を高校で経験

している高校生を「1」、経験していない高校生を「0」として、ピアソンの積率相関を算出し、図3-1を作成した。なお、本論文では、検定の結果、1%の水準で有意であったなかから0.30以上を取り上げた。

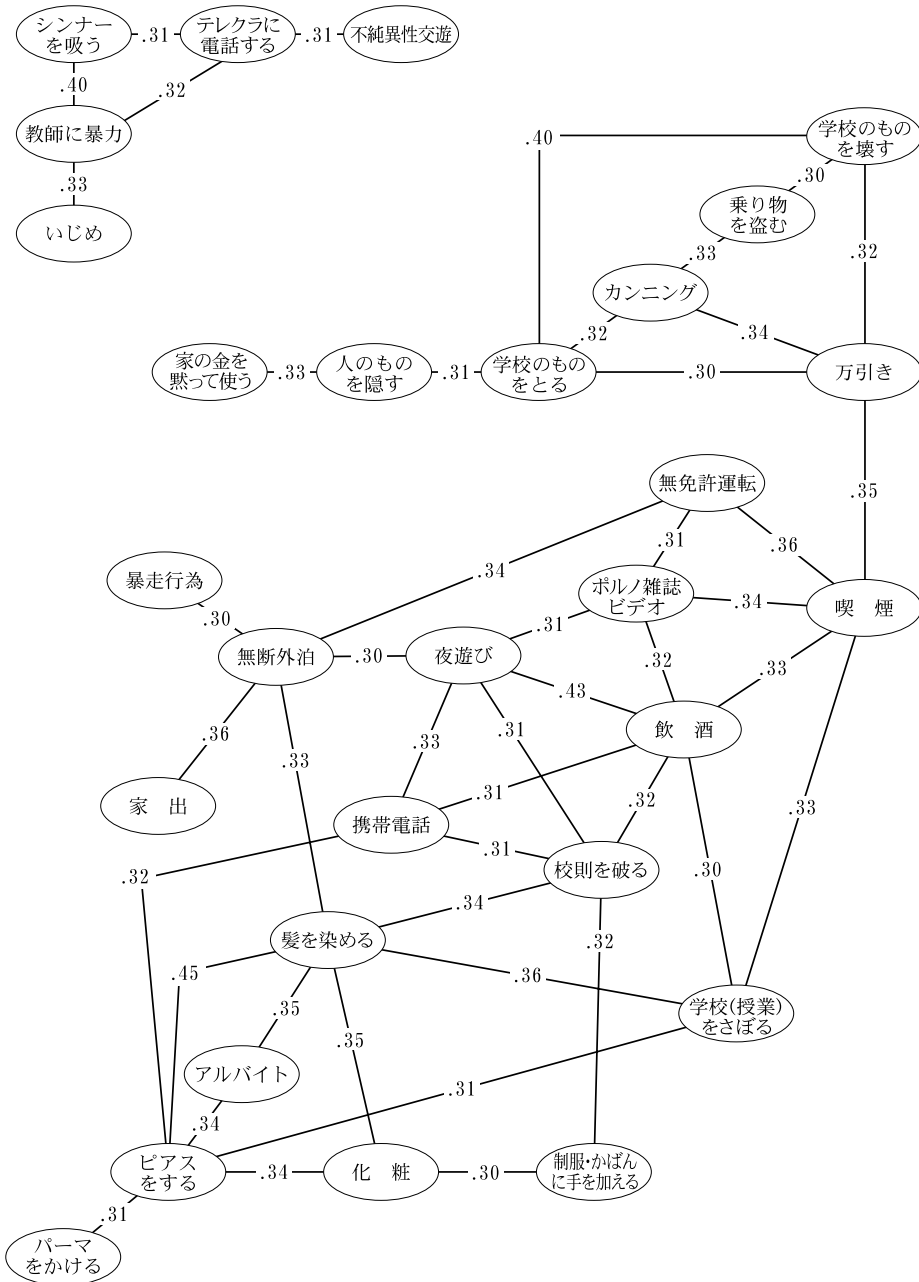


図3-1 非行・問題行動の相関関係図

図3 - 1をみると、喫煙 - 飲酒、飲酒 - 夜遊び、無免許運転 - 無断外泊、などが相関関係にあることが分かる。図3 - 1のなかで、4つ以上の行為と相関関係にある行為をあげておくと、喫煙、学校(授業)をさぼる、夜遊び、髪を染める、などがある。これらの行為は、より多くの非行・問題行動と結びつきやすい特性をもった行為であるため、問題状況の大きい行為といえる。そのため、本論文では、より多くの行為と相関関係にある行為を非行・問題行動として扱う。

3.2 非行・問題行動の継続化と累積化

高校生の非行・問題行動を、学校段階を基準にした経験に関するパターンは、大きく

表3 - 1 非行・問題行動の経験パターン

単位：%

非行・問題行動	経験パターン	経験なし	小・中学校のみ	小・中・高の継続	中・高の継続	高校から	D.K.,N.A.	合計(N)
アルバイト		63.5	1.7	0.7	2.2	30.0	1.9	100.0(3069)
授業中に携帯電話をいじる		54.1	1.1	0.5	4.4	38.0	1.9	100.0(3069)
パーマをかける		79.6	3.4	0.9	1.7	12.3	1.9	100.0(3069)
援助交際		94.2	0.8	0.3	0.3	2.4	2.0	100.0(3069)
シンナーを吸う		96.3	0.9	0.1	0.1	0.7	1.9	100.0(3069)
不純異性交遊		92.2	1.0	0.3	1.1	3.5	2.0	100.0(3069)
ピアスをする		75.9	3.6	0.7	4.8	13.1	1.9	100.0(3069)
両親・祖父母に暴力をふるう		91.0	3.2	0.5	1.0	2.4	1.9	100.0(3069)
髪を染める		58.6	7.1	2.0	10.4	20.0	1.9	100.0(3069)
無免許運転		84.3	3.9	0.6	3.5	5.8	1.9	100.0(3069)
化粧		61.3	3.3	1.6	12.3	19.6	1.9	100.0(3069)
教師に暴力をふるう		94.7	2.3	0.3	0.2	0.6	2.0	100.0(3069)
家出		87.4	6.1	0.5	1.5	2.6	1.9	100.0(3069)
暴走行為		89.8	3.2	0.6	1.7	3.2	1.9	100.0(3069)
学校(授業)をさぼる		54.2	15.1	4.7	9.5	14.6	2.0	100.0(3069)
無断外泊		82.7	3.7	1.4	4.5	5.7	1.9	100.0(3069)
乗り物(自転車・バイクなど)を盗む		90.1	4.6	0.5	1.4	1.6	1.9	100.0(3069)
学校のものをとる		84.0	10.1	1.2	0.9	1.8	1.9	100.0(3069)
学校のをわざと壊す		87.9	8.0	0.6	0.7	0.8	1.9	100.0(3069)
制服・かばんに手を加える		63.7	15.3	2.0	9.5	7.6	1.9	100.0(3069)
子どもだけで夜遊び		42.4	12.1	4.2	22.5	16.9	2.0	100.0(3069)
喫煙		72.0	10.3	2.3	7.2	6.2	2.0	100.0(3069)
カンニング		70.5	20.2	2.4	2.2	2.8	1.9	100.0(3069)
テレクラなどに電話をする		86.4	9.4	0.6	0.9	0.8	1.9	100.0(3069)
他の子をいじめる		81.2	13.9	1.6	0.4	1.0	1.9	100.0(3069)
飲酒		42.9	10.7	10.4	18.6	15.4	2.0	100.0(3069)
家のお金を黙って使う		73.4	18.2	2.3	2.1	2.1	1.9	100.0(3069)
万引き		72.9	19.5	1.8	2.1	1.8	1.9	100.0(3069)
校則を破る		58.1	8.0	5.9	16.4	9.7	1.9	100.0(3069)
人のものを隠す		79.2	14.3	2.4	0.9	1.3	1.9	100.0(3069)
ポルノ雑誌・ビデオを見る		68.0	5.4	6.7	13.1	4.7	2.0	100.0(3069)

3パターンに分けられる。小学校である非行・問題行動を経験し、中・高校まで継続するパターン¹⁾。中学校である非行・問題行動を経験し、高校まで継続するパターン。高校からある非行・問題行動をはじめて経験するパターン。それ以外にも、小・中学校ではある非行・問題行動を経験するが、高校では経験していない、いわば「一過性」ともいべきパターンも考えられる²⁾。

これまで、高校生の非行・問題行動を上記の経験に関するパターンからみていくと、以下の問題が指摘されてきた。1点目は、非行・問題行動を経験している高校生の多くが、小学校もしくは中学校から継続的に経験している子どもであるという問題。2点目は、非行・問題行動を小・中学校の早い学校段階から継続的に経験している子どものほうが、累積的に他の非行・問題行動を経験し、より問題のある方向へむかうという問題(秦1984・秦 2000)。そこで本節では、前者を「非行・問題行動の継続化の問題」、後者を「非行・問題行動の累積化の問題」と呼び、現代高校生にもこの2つの問題がみられるのかを、経験に関するパターンから考察する。

表3 - 1は、各行為の経験に関するパターンをしめした表である。万引きについてみると、高校での経験の割合よりも、小・中学校のみの経験の割合のほうが大きく上回り、小・中学校のみで経験する「一過性」のパターンといえる。しかし、夜遊びについてみると、小・中学校のみの経験の割合よりも、高校での経験の割合が大きく上回り、「一過性」のパターンとはいえない。表をみても、「一過性」のパターンは少なく、現代高校生が数多くの非行・問題行動を高校で経験していることが分かる。

では、非行・問題行動を経験している現代高校生にも、非行・問題行動の継続化の問題はみられるのだろうか。表3 - 2からみてみる。夜遊びをみると、小学校からの継続経験の割合は9.6%、中学校からの継続経験の割合は51.6%、高校からの経験の割合は38.8%となり、夜遊びを経験している高校生の多くは、高校入学以前から継続的に経験している子どもである。いっぽう、学校(授業)をさぼるをみると、小学校からの継続経験の割合は16.4%、中学校からの継続経験の割合は33.0%、高校からの経験の割合は50.6%となり、学校(授業)をさぼるを経験している高校生の多くが、高校から経験する子どもである。

表3 - 2から、夜遊び、喫煙、飲酒など、高校入学以前からの継続経験の割合が高い非行・問題行動は数多くあり、非行・問題行動を経験している高校生の多くが、高校入学以前から継続的に経験している子どもであるようにみえる。しかしいっぽうで、学校(授業)をさぼる、暴走行為、無免許運転など、高校からの経験の割合が高い非行・問題行動も数多くある。このことから、現代高校生の非行・問題行動は、小・中学校から非行・問題行動を継続的に経験している子どもで多くが占められているのではなく、小・中・高校のどの学校段階からも発生する、非行・問題行動の発生時期の拡散化ともいえる状況にある。

表 3 - 2 非行・問題行動を経験している高校生の経験パターン

単位：%

非行・問題行動	経験パターン	小学校から 継続	中学校から 継続	高校から	合 計 (N)
アルバイト		2.2	6.5	91.3	100.0 (1010)
授業中に携帯電話をいじる		1.1	10.3	88.6	100.0 (1315)
パーマをかける		6.3	11.5	82.2	100.0 (461)
援助交際		10.8	8.6	80.6	100.0 (93)
シンナーを吸う		14.8	11.1	74.1	100.0 (27)
不純異性交遊		5.4	22.3	72.3	100.0 (148)
ピアスをする		3.8	25.9	70.3	100.0 (572)
両親・祖父母に暴力をふるう		11.7	25.8	62.5	100.0 (120)
髪を染める		6.0	32.2	61.8	100.0 (995)
無免許運転		6.0	35.2	58.8	100.0 (301)
化粧		4.8	36.6	58.6	100.0 (1026)
教師に暴力をふるう		24.2	18.2	57.6	100.0 (33)
家出		10.8	32.3	56.8	100.0 (139)
暴走行為		11.5	34.0	54.5	100.0 (156)
学校(授業)をさぼる		16.4	33.0	50.6	100.0 (883)
無断外泊		12.0	38.8	49.2	100.0 (358)
乗り物(自転車・バイクなど)を盗む		13.3	40.0	46.7	100.0 (105)
学校のものをとる		31.7	23.3	45.0	100.0 (120)
学校のものをわざと壊す		29.2	30.8	40.0	100.0 (65)
制服・かばんに手を加える		10.3	49.9	39.8	100.0 (585)
子どもだけで夜遊び		9.6	51.6	38.8	100.0 (1336)
喫煙		14.7	45.6	39.6	100.0 (482)
カンニング		33.0	29.5	37.4	100.0 (227)
テレクラなどに電話をする		26.4	37.5	36.1	100.0 (72)
他の子をいじめ		53.3	12.0	34.8	100.0 (92)
飲酒		23.4	41.9	34.7	100.0 (1362)
家のお金を黙って使う		35.9	31.8	32.3	100.0 (198)
万引き		32.0	36.0	32.0	100.0 (175)
校則を破る		18.5	51.2	30.3	100.0 (983)
人のものを隠す		52.1	19.3	28.6	100.0 (140)
ポルノ雑誌・ビデオを見る		27.4	53.4	19.2	100.0 (755)

このような状況下で、非行・問題行動の累積化の問題が、現代高校生にもみられるのだろうか。ここでは、図 3 - 1 の行為の相関関係図のなかから、喫煙 - 飲酒、飲酒 - 夜遊び、そして無断外泊 - 無免許運転を取り上げて、みる。

表 3 - 3 は、喫煙の経験に関するパターンと、飲酒の高校での経験のクロス表である。表 3 - 3 をみると、喫煙を小学校もしくは中学校から継続的に経験している子どものほうが、喫煙を高校から経験する子どもに比べて、飲酒を高校で経験する割合が高いとはいえない。喫煙を経験している年限の長さに関わらず、喫煙を経験している高校生は、飲酒を高校で経験している。また、飲酒 - 夜遊び、無断外泊 - 無免許運転においても、いっぽうの行為を早い学校段階から継続的に経験している子どものほうが、もういっぽ

表 3 3 喫煙の経験パターン×飲酒

単位：%

喫煙 \ 飲酒	高校で経験していない	高校で経験している	D.K.,N.A.	合計(N)
経験なし	64.2	35.8	0.0	100.0 (2210)
小・中学校のみ	45.7	54.3	0.0	100.0 (317)
小学校から継続	21.1	77.5	1.4	100.0 (71)
中学校から継続	13.6	86.4	0.0	100.0 (220)
高校から	19.9	80.1	0.0	100.0 (191)
D.K.,N.A.	0.0	0.0	98.3	100.0 (60)
合計	53.7	44.4	2.0	100.0 (3069)

表 3 4 飲酒の経験パターン×夜遊び

単位：%

飲酒 \ 飲酒	高校で経験していない	高校で経験している	D.K.,N.A.	合計(N)
経験なし	76.6	23.4	0.0	100.0 (1318)
小・中学校のみ	68.1	31.9	0.0	100.0 (329)
小学校から継続	34.8	65.2	0.0	100.0 (319)
中学校から継続	27.0	73.0	0.0	100.0 (571)
高校から	36.9	62.9	0.2	100.0 (472)
D.K.,N.A.	0.0	0.0	98.3	100.0 (59)
合計	54.5	43.5	2.0	100.0 (3069)

表 3 5 無断外泊の経験パターン×無免許運転

単位：%

無断外泊 \ 無免許運転	高校で経験していない	高校で経験している	D.K.,N.A.	合計(N)
経験なし	94.3	5.7	0.0	100.0 (2539)
小・中学校のみ	81.4	18.6	0.0	100.0 (113)
小学校から継続	58.1	41.9	0.0	100.0 (43)
中学校から継続	57.6	42.4	0.0	100.0 (139)
高校から	66.5	33.5	0.0	100.0 (176)
D.K.,N.A.	0.0	0.0	100.0	100.0 (59)
合計	88.3	9.8	1.9	100.0 (3069)

うの行為を高校で経験する傾向はみられない(表3-4・5)。

現代高校生においては、非行・問題行動を早い学校段階から継続的に経験している子どものほうが、高校から非行・問題行動を経験する子どもに比べて、累積的に他の非行・問題行動を経験する傾向はみられない。

以上から、現代高校生は、小・中・高校のどの学校段階からも非行・問題行動を経験するという、非行・問題行動の発生時期の拡散化ともいえる状況にある。さらに、非行・問題行動を経験している高校生は、小・中・高校のどの学校段階から非行・問題行動を経験しているのかという、非行・問題行動の経験年限の長さに関係なく、他の非行・問題行動を累積的に経験する可能性があるといえる。

3.3 非行・問題行動に対する意識

これまでみてきたように、子どもたちの非行・問題行動は、どの学校段階からも経験する可能性があり、どんな子どもでもおこしうる広範化した様相を呈している。こうした状況を考えるうえで、いま高校生自身が、そもそも非行・問題行動をどのように捉えているのか、かれらの意識を確認しておく必要がある。一般的に、子どもたちの非行や犯罪について語られるとき、「規範意識自体が低下している」という指摘がよくされる。しかし、子どもたちの規範意識は本当に低下しているのだろうか。また、もしかりに規範意識が低下しているとしても、はたしてそうした要因だけで非行・問題行動の多くを説明できるのだろうか。

しかも、非行・問題行動と一言にいても、その行為内容はさまざまであり、それぞれの行為に対する意識も異なっているはずである。そこで本節では、さまざまな非行・問題行動に対して、現代高校生がいったいどんな意識をもっているのかをみておくことにしたい。表3-6にしめた結果は、それぞれの非行・問題行動に対して、「絶対にしてはいけない」、「できるだけしないほうがよい」、「これくらいならしてもよい」の3水準で高校生に回答を求めたものである。

これをみると、「絶対にしてはいけない」という回答が70%を超えているものは、シンナーを吸う、万引き、無免許運転、援助交際、などという触法行動がまず目につく。そして、両親・祖父母に暴力をふるう、先生に暴力をふるう、学校のものをわざと壊す、などの暴力性の高い行為がある。これに加えて、他の子をいじめる、人のものを隠す、などといういじめに類する行為がみられる。

全体的にみて、やはり触法行為に対しては「絶対にしてはいけない」という割合が、たしかに高い。また、同じく「絶対にしてはいけない」と回答している割合が高いものとして、家や家族に関する行為もみられる。たとえば、家のお金をだまって使うについてみると、援助交際や無免許運転よりも「絶対にしてはいけない」と答える割合が多いほどである。これと似たような傾向は、つぎの結果からもうかがえる。同じ暴力行為にもかかわらず、教師に対するものより、両親・祖父母に対するもののほうが、「絶対にしてはいけない」と答える割合が12.1ポイントも高い。いってみれば、家族に関連する規範意識は高いとも考えられる。

続いて、「これくらいならしてもよい」という回答が半数以上を占めているものについてみておこう。順にあげてみると、アルバイト、パーマをかける、化粧、髪を染める、ピアスをする、制服・かばんに手を加えるといったように、多くは校則などによって規制されている行為である。その意味では、現代高校生の多くは、こうした行為を学校側が禁止・規制している意図や根拠をほとんど理解していない。

たしかに、多くの非行・問題行動のなかでも、より過激な「触法」行為については、大多数の現代高校生が「絶対にしてはいけない」と回答している。しかし、同じ「触法」行為であっても、校則違反、規則違反に類する行為であれば、これを許容、ないしは容

認する現代高校生が多数にのぼっている。

表3 - 6 非行・問題行動に対する意識

単位：%

非行・問題行動	意識	絶対にしてはいけない	できるだけないほうがよい	これくらいならしてもよい	D.K.,N.A	合計(N)
シンナーを吸う		90.9	5.8	1.8	2.3	100 (3069)
両親・祖父母に暴力をふるう		84.0	12.3	2.2	1.3	100 (3069)
他の子をいじめる		79.4	16.8	2.3	1.4	100 (3069)
乗り物(自転車・バイクなど)を盗む		83.2	13.0	2.5	1.4	100 (3069)
万引き		84.1	12.0	2.7	1.8	100 (3069)
学校のをわざと壊す		79.0	16.9	2.8	1.3	100 (3069)
家のお金を黙って使う		77.7	18.1	2.8	1.3	100 (3069)
人のものを隠す		78.2	17.0	3.4	1.3	100 (3069)
学校のをとる		75.4	19.6	3.6	1.3	100 (3069)
教師に暴力をふるう		71.9	21.5	4.8	1.4	100 (3069)
カンニング		64.8	28.0	5.8	1.4	100 (3069)
援助交際		71.5	20.7	6.2	1.7	100 (3069)
無免許運転		67.3	24.3	6.9	1.4	100 (3069)
暴走行為		60.3	30.2	7.9	1.6	100 (3069)
テレクラなどに電話をする		57.9	31.6	8.9	1.4	100 (3069)
喫煙		52.0	34.8	11.8	1.5	100 (3069)
学校(授業)をさぼる		23.8	60.6	13.3	1.6	100 (3069)
不純異性交遊		53.7	28.1	15.9	1.3	100 (3069)
家出		26.4	54.1	18.0	2.3	100 (3069)
無断外泊		36.1	41.8	20.7	1.4	100 (3069)
飲酒		27.4	43.8	27.3	1.4	100 (3069)
校則を破る		16.3	53.7	28.3	1.7	100 (3069)
授業中に携帯電話をいじる		18.0	48.1	32.5	1.5	100 (3069)
子どもだけで夜遊び		11.3	45.8	41.2	1.5	100 (3069)
ポルノ雑誌・ビデオを見る		18.2	34.1	45.7	1.5	100 (3069)
制服・かばんに手を加える		8.6	37.3	52.6	1.7	100 (3069)
ピアスをする		11.7	27.8	58.9	1.7	100 (3069)
髪を染める		5.9	27.8	65.0	1.9	100 (3069)
化粧		6.1	25.5	66.7	1.8	100 (3069)
パーマをかける		7.4	23.5	67.7	1.5	100 (3069)
アルバイト		4.1	15.4	78.9	1.6	100 (3069)

「これくらいならしてもよい」の割合の低い順

3.4 非行・問題行動に対する意識と行動

そこで、問題はそうした意識と、実際の行動との関係である。むろん、意識と行動はかならずしも一致するものではない。まして、誘惑の強いもの、規制の弱いものなら、「絶対にしてはいけない」と思っているながら、思わず「やってしまった」ということも十分に考えられる。逆に、「これくらいならしてもよい」と思っているにもかかわらず、自分自身は「しない」ということもある。こうした事実を考えてみても、すべて意識が行動を規

定しているということはない。それどころか、ある行為を経験していることで、かえって「これくらいならしてもよい」と思ってしまうということもある。いわば、行動が意識を形成してしまうということもある。

そうすると、意識と行動とのあいだの組み合わせは、単純化すればつぎの4つがある。「してもよい」から「する」、「してはいけない」から「しない」という2つは、素直なかたちである。これに対して、「してはいけない」けど「する」、「してもよい」けど「しない」という2つもある。この2つはアンビバレントなかたちであるとはいえ、実際にはありがちなことである。ここでは、こうした意識と行動に関する4つの組み合わせを使って、現代高校生の非行・問題行動の実態に迫ることにしたい。

なお、この4つの組み合わせを作成する手順は、つぎのようなものである。すでに述べたように、非行・問題行動に対する意識については、「絶対にしてはいけない」、「できるだけしないほうがよい」、「これくらいならしてもよい」の3つである。以下の分析では、この3つのうち「絶対にしてはいけない」と「できるだけしないほうがよい」をあわせて「してはいけない」とし、「これくらいならしてもよい」を「してもよい」として取り扱うことにした。そして実際の行動については、高校段階における経験から、便宜的に「する」、「しない」に分けた。

こうした意識と行動をそれぞれ組み合わせることによって、つぎの4つの類型が設定できる。「してはいけない/しない」、「してはいけない/する」、「してもよい/しない」、そして「してもよい/する」の4つである。これによって、つぎの2点が明らかになる。1点目は、現代高校生は、はたして非行・問題行動をしてもよいと思っているから、しているのかという点。2点目は、意識と行動がアンビバレントな関係にある非行・問題行動とはいったいどういうものなのかという点。つまり、これによって表面的な行動だけではみえない、非行・問題行動の内実が析出できる。

そこで、実際の結果である。表3-7にしめした結果は、さきほどの「してはいけない/しない」の割合の多い順に並べたものである。これをみると、いくつかのパターンがある。まず、「してはいけない/しない」という割合が高い割合を数えており、これ以外はせいぜい1割を超える程度のものである。シンナーを吸う、学校のものをわざと壊す、他の子をいじめる、乗り物を盗むということをはじめとして、無断外泊あたりまでの行為がこれにあたる。これらは、いずれも「してはいけない/しない」という割合が70%以上である。そして、こうした行為は、どれをみても「絶対にしてはいけない」と回答した割合がきわめて高かった行為である。

いっぽう、「してはいけない/しない」という割合が7割に満たない行為になると、他の類型でも一定の割合を数えている。たとえば、学校(授業)をさぼるという行為は、たしかに「してはいけない/しない」というものがもっとも高い割合をしめてはいるが、「してはいけない/する」という割合も21.4%である。さらに、飲酒、授業中に携帯電話をいじる、夜遊びという行為になると、同じく「してはいけない/する」という割合

が2割程度を数えているいっぽう、「してもよい/する」という割合も2割前後に達している。

目を転じて「してはいけない/しない」の割合が少ない非行・問題行動をみてみよう。アルバイト、化粧、髪を染める、パーマをかける、そしてピアスをするというようなものである。これらの行為をみると、もっとも割合の高いものは、いずれも「してもよい/しない」である。この割合を、さきほどのアルバイトという行為から順に示しておくと47.5%、36.9%、36.8%、53.7%、そして41.9%になる。こうした行為になると、してはいけないからしないということより、してもよいけどしないということである。このことを、それぞれの行為内容を含めて考えてみると、このくらいのことならやっていいけれど、おそらく学校側の規制によって、実際には「しない」ということであろうか。

このことは、つぎの結果からも明らかである。「してもよい/しない」に続いて割合の高いものは、「してもよい/する」である。こうなると、学校側の規制の有無にかかわらず、ともかく「する」ということである。この割合についても、さきほどと同じくアルバイトという行為から順に示しておくと31.0%、29.2%、27.7%、13.5%、そして16.5%である。

これまで述べてきたアルバイト、化粧という行為では、ごく大まかにいえば「してはいけない/しない」、「してもよい/しない」、そして「してもよい/する」という3つに完全に分極化している。したがって、表面的には現われてきていないだけで、学校側の規制によってかろうじて実際の行動にはいたっていないということである。

ここで、全体的にみて割合の少ない「してはいけない/する」ということについてみておきたい。これに関して相対的に割合の高い行為をあげておくと、飲酒24.7%、学校(授業)をさぼる21.4%、授業中に携帯電話をいじる21.0%、そして校則を破る17.1%である。

以上の結果をすこしまとめておくとつぎのようになる。非行・問題行動のなかでもかなり過激・悪質な行為の場合、全体の8割～9割の高校生は「してはいけない/しない」という。しかし、行為内容が軽微になるにつれて、この割合が明らかに低下していく。家出、喫煙、無断外泊という行為では、この割合がほぼ7割程度になる。飲酒、授業中に携帯電話をいじるという行為になると4割台である。さらに、パーマをかける、髪を染めるということになると、もはや3割に満たない程度である。そして、そのいっぽうで「してもよい/しない」、あるいは「してもよい/する」という割合が逆に高くなる。また、行為内容によっては、さきほど述べたように「してはいけない/する」という割合も高くなっている。

率直にいうと、現代高校生の規範意識はけっして低下していないと主張できる部分と、十分に規範意識が身につけているとはとてもいえない部分とが、明らかに混在している。たしかに、過激・悪質な非行・問題行動については、それほど大きな問題はみつからな

表3 - 7 非行・問題行動に対する意識と行動

単位：%

非行・問題行動	意識と行為				D.K.,N.A	合計(N)
	してはいけない しない	してもよい しない	してはいけない する	してもよい する		
シンナーを吸う	95.5	1.4	0.7	0.2	2.2	100 (3069)
学校のをわざと壊す	93.7	2.1	1.5	0.6	2.2	100 (3069)
他の子をいじめる	93.1	1.7	2.5	0.5	2.3	100 (3069)
乗り物(自転車・バイクなど)を盗む	92.8	1.6	2.7	0.7	2.2	100 (3069)
教師に暴力をふるう	92.1	4.3	0.7	0.3	2.6	100 (3069)
両親・祖父母に暴力をふるう	92.0	1.8	3.6	0.3	2.3	100 (3069)
学校のをとる	91.2	2.7	3.1	0.8	2.2	100 (3069)
人のものを隠す	90.8	2.4	3.7	0.8	2.2	100 (3069)
万引き	90.7	1.5	4.6	1.1	2.2	100 (3069)
家のお金を黙って使う	89.8	1.6	5.3	1.0	2.2	100 (3069)
援助交際をする	89.1	5.3	2.3	0.7	2.5	100 (3069)
テレクラなどに電話をする	87.5	7.8	1.4	0.9	2.4	100 (3069)
暴走行為	87.1	5.4	2.8	2.2	2.4	100 (3069)
カンニング	86.4	3.9	5.7	1.7	2.3	100 (3069)
無免許運転	83.8	4.1	7.2	2.5	2.3	100 (3069)
不純異性交遊	79.5	12.7	3.0	1.8	3.0	100 (3069)
家出	77.4	15.8	2.6	1.9	2.3	100 (3069)
喫煙	76.5	5.6	9.7	6.0	2.2	100 (3069)
無断外泊	72.3	13.8	5.1	6.5	2.2	100 (3069)
学校(授業)をさぼる	62.3	6.0	21.4	7.0	3.2	100 (3069)
校則を破る	52.5	13.2	17.1	14.8	2.4	100 (3069)
アダルトビデオ・ポルノ雑誌を見る	47.1	25.7	4.9	19.6	2.6	100 (3069)
飲酒	45.9	7.5	24.7	19.6	2.3	100 (3069)
授業中に携帯電話をいじる	44.6	10.3	21.0	21.8	2.2	100 (3069)
制服・かばんに手を加える	41.6	37.1	3.9	15.1	2.3	100 (3069)
子どもだけで夜遊び	39.8	14.4	17.0	26.3	2.6	100 (3069)
ピアスをする	37.1	41.9	2.1	16.5	2.4	100 (3069)
パーマをかける	29.1	53.7	1.5	13.5	2.2	100 (3069)
髪を染める	28.7	36.8	4.7	27.7	2.2	100 (3069)
化粧	27.2	36.9	4.1	29.2	2.5	100 (3069)
アルバイト	17.3	47.5	1.9	31.0	2.3	100 (3069)

「してはいけない・しない」の割合の高い順

い。しかし、行為内容が軽微になるにつれて、規範意識の低下をうかがわせる結果もないわけではない。とくに、校則違反、規則違反に類する行為になると、そうした傾向が明らかに認められる。だからといって現代高校生の多数が、校則違反、規則違反を実際におこしているわけではない。いうまでもなく、ここには学校側の規制という事実がある。

むろん、この事実だけから考えれば、学校側の規制はそれなりの正当性をもつものと受け取れる。しかし、これまでみてきたように「規制」による効果があるだけで、実際に規範意識が身についているのかどうか疑わしい側面もある。実際に問題をおこさなければ、それでよしとすべきなのか。規範意識が育ってこそその学校教育と考えるべきなの

か。このへんの事情をどう評価するかということによって、学校教育のありかたは確実に変わる。この問題を考えるうえでも、いったいどんな要因や背景のなかで現代高校生が非行・問題行動をおこしているのか、つぎにより詳細の検討を行なうことにしたい。

4 . 現代高校生の非行・問題行動に関する分析

本章では、2章の枠組みに沿って、経験に関するパターン、意識と行動に関する組み合わせから現代高校生の非行・問題行動を分析する。取り上げる非行・問題行動は、3章の結果より、多くの非行・問題行動と結びついている行為のなかから、学校(授業)をさぼる、髪を染めるとする。

4.1 非行・問題行動と高校格差

まず、非行・問題行動と高校格差との関係を見る。1970年代から1980年代には、選抜・配分機能と社会化機能が結びついていたため、「高校格差」のなかで上位の高校ほど非行・問題行動が少なく、下位の高校ほど非行・問題行動が多く発生するという対応関係がみられた。では、現代高校生の非行・問題行動にもこのような対応関係がみられるのであろうか。

学校(授業)をさぼるについてみると、経験に関するパターンでは、高校からの経験率、高校での経験率(高校入学以前からの継続経験率と高校からの経験率を足したもの)

表4 - 1 高校ランク×さぼるの経験パターン

単位：%

高校ランク \ さぼる	経験なし	小・中学校のみ	高校入学以前から継続	高校から	D.K.,N.A.	合計(N)
ランク	63.2	13.2	11.8	11.1	0.7	100.0(296)
ランク	53.5	12.4	14.7	18.2	1.2	100.0(258)
ランク	56.1	14.1	12.3	15.6	1.9	100.0(1644)
ランク	57.7	15.1	13.9	11.7	1.6	100.0(317)
ランク	42.2	20.2	20.9	13.4	3.2	100.0(554)
合計	54.2	15.1	14.2	14.6	2.0	100.0(3069)

表4 - 2 高校ランク×さぼるの意識と行動

単位：%

高校ランク \ さぼる	してはいけない しない	してもよい しない	してはいけない する	してもよい する	D.K.,N.A.	合計(N)
ランク	67.6	7.8	14.2	8.8	1.7	100.0(296)
ランク	58.5	5.8	25.2	7.8	2.7	100.0(258)
ランク	63.4	5.8	21.0	6.6	3.2	100.0(1644)
ランク	65.6	5.7	19.6	5.7	3.5	100.0(317)
ランク	55.8	6.1	25.8	7.9	4.3	100.0(554)
合計	62.3	6.0	21.4	7.0	3.2	100.0(3069)

ともに高校ランクとの対応関係はみられない(表4-1)。また、意識と行動に関する組み合わせでも、「してはいけない/しない」、「してもよい/しない」、「してはいけない/する」、そして「してもよい/する」の4類型で高校ランクとの対応関係はみられない(表4-2)。

表は省略するが、髪を染めるにおいても、経験に関するパターン、意識と行動に関する組み合わせともに、高校ランクとの対応関係はみられない。

現在でも輪切り選抜が行なわれ、選抜・配分機能が存続しているが、学校(授業)をさぼる、髪を染めると高校ランクとの対応関係がみられないことは、選抜・配分機能と社会化機能との結びつきが弱まっていることをしめしている。

4.2 非行・問題行動と学歴意識

すでに述べたように、選抜・配分機能と社会化機能との結びつきは、地位欲求不満説から理解されてきた。地位欲求不満説は選抜・配分機能の過程で成功していない生徒が、将来的な地位に対する欲求不満状況から、社会や学校に対して反抗的な価値観や行動様式を身につけるモデルである。だが、地位欲求不満説が成立するには、学歴獲得の目標を高校生が共有しているという前提条件が必要となる。

近年の大学入学の容易化や、学習指導のありかたが緩やかになっている状況下で、現代高校生は学歴獲得の目標をかならずしも共有せず、そのため、地位欲求不満説から現代高校生の非行・問題行動を理解することは困難になっていると考えられる。そこで、

表4-3 どのような進路に進みますか×さぼるの経験パターン

単位：%

学歴意識 \ さぼる	経験なし	小・中学校のみ	高校入学以前から継続	高校から	D.K.,N.A.	合計(N)
大学・短大	57.7	14.5	11.8	14.4	1.7	100.0(1391)
専門学校	52.2	13.2	17.2	15.4	1.9	100.0(720)
就職	51.6	17.3	14.6	14.3	2.2	100.0(642)
その他	46.5	16.9	19.3	15.7	1.6	100.0(254)
D.K.,N.A.	62.5	15.6	12.5	6.3	3.1	100.0(62)
合計	54.2	15.1	14.2	14.6	2.0	100.0(3069)

表4-4 有名な学校から優先して社員を採用する×さぼるの経験パターン

単位：%

学歴意識 \ さぼる	経験なし	小・中学校のみ	高校入学以前から継続	高校から	D.K.,N.A.	合計(N)
賛成できる	46.1	15.8	18.2	17.6	2.4	100.0(165)
やや賛成できる	56.1	14.2	14.5	13.9	1.3	100.0(310)
あまり賛成できない	57.6	15.0	11.5	14.7	1.3	100.0(1343)
まったく賛成できない	51.9	15.0	17.0	14.3	1.8	100.0(1157)
D.K.,N.A.	43.6	18.1	10.6	12.8	14.9	100.0(94)
合計	54.2	15.1	14.2	14.6	2.0	100.0(3069)

表 4 - 5 どのような進路に進みますか×さぼるの意識と行動

単位：％

学歴意識 \ さぼる	してはけない しない	してもよい しない	してはけない する	してもよい する	D.K.,N.A.	合 計 (N)
大学・短大	65.7	5.8	19.6	6.4	2.6	100.0 (1391)
専門学校	59.4	4.7	25.3	6.7	3.9	100.0 (720)
就 職	61.1	6.5	22.7	6.1	3.6	100.0 (642)
そ の 他	52.8	9.4	20.9	14.2	2.8	100.0 (254)
D.K.,N.A.	69.4	8.1	8.1	6.5	8.1	100.0 (62)
合 計	62.3	6.0	21.4	7.0	3.2	100.0 (3069)

表 4 - 6 有名な学校から優先して社員を採用する×さぼるの意識と行動

単位：％

学歴意識 \ さぼる	経験なし	小・中学校 のみ	高校入学以 前から継続	高校から	D.K.,N.A.	合 計 (N)
賛成できる	52.1	9.7	24.2	11.5	2.4	100.0 (165)
やや賛成できる	62.6	6.8	21.0	6.5	3.2	100.0 (310)
あまり賛成できない	66.5	5.0	20.6	5.4	2.5	100.0 (1343)
まったく賛成できない	59.1	6.7	22.9	8.3	3.0	100.0 (1157)
D.K.,N.A.	57.4	4.3	12.8	8.5	17.0	100.0 (94)
合 計	62.3	6.0	21.4	7.0	3.2	100.0 (3069)

非行・問題行動と学歴意識との関係のみてみる。

学校(授業)をさぼるについてみると、経験に関するパターンでは、高校からの経験率、高校での経験率ともに学歴意識とのあいだに一定の関係はみられない(表4-3・4)。また、意識と行動に関する組み合わせでも、4類型と学歴意識とのあいだに一定の関係はみられない(表4-5・6)。

表は省略するが、髪を染めるにおいても、経験に関するパターン、意識と行動に関する組み合わせともに、学歴意識とのあいだに一定の関係はみられない。

学校(授業)をさぼる、髪を染めると学歴意識とのあいだに明確な関係はみられない。そのため、地位欲求不満説から学校(授業)をさぼる、髪を染めるを捉えることはできない。現代高校生は、将来的展望の挫折感から学校(授業)をさぼる、髪を染めるを経験しているのではなく、学歴意識とは関係なく経験しているといえる。

4.3 非行・問題行動と高校への親和性

これまでのことから、現代高校生の非行・問題行動は、自己の成績が可視的になる学校名という社会的評価からあまり影響を受けていないと考えられる。そこで、高校生自身が高校生活に充実感を感じているかという主観的評価に視点を移して、在学する高校への意味づけである、高校への親和性と非行・問題行動との関係を考察する。ここでは、高校への親和性のアタッチメントとインボルブメントのそれぞれについて分析する。

まずは、非行・問題行動とアタッチメントとの関係をみる。学校(授業)をさぼるに

ついてみると、経験に関するパターンでは、教師に肯定的な感情を抱いている生徒のほうが、高校からの経験率、高校での経験率ともに低くなる（表4 - 7・8）。また、意識

表4 - 7 好きな先生がたくさんいる×さぼるの経験パターン

単位：%

さぼる アタッチメント	経験なし	小・中学校のみ	高校入学以前から継続	高校から	D.K.,N.A.	合計(N)
あてはまる	63.1	15.0	7.5	11.2	3.2	100.0 (187)
ややあてはまる	60.3	15.6	12.2	10.6	1.4	100.0 (887)
あまりあてはまらない	55.5	13.5	13.7	15.5	1.7	100.0 (1358)
まったくあてはまらない	40.4	17.5	20.0	19.2	2.9	100.0 (624)
D.K.,N.A.	38.5	23.1	23.1	7.7	7.7	100.0 (13)
合計	54.2	15.1	14.2	14.6	2.0	100.0 (3069)

表4 - 8 先生から信頼されている×さぼるの経験パターン

単位：%

さぼる アタッチメント	経験なし	小・中学校のみ	高校入学以前から継続	高校から	D.K.,N.A.	合計(N)
あてはまる	59.1	13.6	13.6	12.1	1.5	100.0 (132)
ややあてはまる	65.8	14.8	8.1	11.0	0.4	100.0 (831)
あまりあてはまらない	55.3	15.7	13.7	14.7	0.5	100.0 (1386)
まったくあてはまらない	33.7	15.4	28.1	21.4	1.4	100.0 (513)
D.K.,N.A.	47.8	11.6	8.2	12.6	19.8	100.0 (207)
合計	54.2	15.1	14.2	14.6	2.0	100.0 (3069)

表4 - 9 好きな先生がたくさんいる×さぼるの意識と行動

単位：%

さぼる アタッチメント	してはけない しない	してもよい しない	してはけない する	してもよい する	D.K.,N.A.	合計(N)
あてはまる	69.5	7.0	16.0	2.1	5.3	100.0 (187)
ややあてはまる	71.0	3.9	18.3	4.4	2.4	100.0 (887)
あまりあてはまらない	62.9	5.2	22.5	6.5	3.0	100.0 (1358)
まったくあてはまらない	46.6	10.4	25.5	13.3	4.2	100.0 (624)
D.K.,N.A.	46.2	15.4	15.4	15.4	7.7	100.0 (13)
合計	62.3	6.0	21.4	7.0	3.2	100.0 (3069)

表4 - 10 先生から信頼されている×さぼるの意識と行動

単位：%

さぼる アタッチメント	してはけない しない	してもよい しない	してはけない する	してもよい する	D.K.,N.A.	合計(N)
あてはまる	60.6	10.6	18.2	6.8	3.8	100.0 (132)
ややあてはまる	75.3	4.7	15.9	3.0	1.1	100.0 (831)
あまりあてはまらない	64.9	5.1	22.5	5.6	1.9	100.0 (1386)
まったくあてはまらない	38.0	9.9	31.4	17.5	3.1	100.0 (513)
D.K.,N.A.	53.6	4.8	14.0	6.8	20.8	100.0 (207)
合計	62.3	6.0	21.4	7.0	3.2	100.0 (3069)

と行動に関する組み合わせでは、教師に肯定的な感情を抱いている生徒のほうが、「してはいけない/しない」の割合が多く、「してはいけない/する」、または「してもよい/する」の割合が少なくなる(表4-9・表4-10)。

表は省略するが、髪を染めるにおいても、学校(授業)をさぼるとほぼ同じ傾向がみられる。経験に関するパターンでは、教師に抱く肯定的感情が最も高い生徒は、最も低い生徒に比べて、高校での経験率が約半分となる(「好きな先生がたくさんいる」20.9% 41.5%、「先生から信頼されている」27.2% 45.6%)。また、意識と行動に関する組み合わせでは、教師に抱く肯定的感情が最も高い生徒は、最も低い生徒に比べて、「してはいけない/しない」の割合が多く(41.2% 18.6%、37.1% 16.0%:以下、数字の順序は学校(授業)をさぼると同様)、「してもよい/する」の割合が少なくなる(17.6% 36.4%、18.9% 40.9%)。

では、インボルブメントに関してはどうか。学校(授業)をさぼるについてみると、経験に関するパターンでは、学校の活動への参加が積極的な生徒ほど、高校からの経験率、高校での経験率ともに低くなる(表4-11・12)。また、意識と行動に関する組み合わせでは、学校の活動への参加が積極的な生徒のほうが、「してはいけない/しない」の割合が多く、「してはいけない/する」、または「してもよい/する」の割合が少なくなる(表4-13・表4-14)。

表は省略するが、髪を染めるにおいても、学校(授業)をさぼるとほぼ同じ傾向がみられる。経験に関するパターンでは、学校の活動への参加が最も積極的な生徒は、最も

表4-11 当番の仕事をする×さぼるの経験パターン

単位: %

インボルブメント	さぼる					
	経験なし	小・中学校のみ	高校入学以前から継続	高校から	D.K.,N.A.	合計(N)
あてはまる	63.1	15.0	7.5	11.2	3.2	100.0(184)
ややあてはまる	58.9	15.4	12.4	11.7	1.7	100.0(1326)
あまりあてはまらない	39.3	16.1	20.3	22.1	2.1	100.0(745)
まったくあてはまらない	20.1	16.7	35.1	24.1	4.0	100.0(174)
D.K.,N.A.	10.0	20.0	20.0	20.0	30.0	100.0(10)
合計	54.2	15.1	14.2	14.6	2.0	100.0(3069)

表4-12 宿題をいつもする×さぼるの経験パターン

単位: %

インボルブメント	さぼる					
	経験なし	小・中学校のみ	高校入学以前から継続	高校から	D.K.,N.A.	合計(N)
あてはまる	71.7	10.1	8.0	6.5	3.6	100.0(138)
ややあてはまる	66.0	15.1	8.5	8.9	1.5	100.0(827)
あまりあてはまらない	55.5	14.4	12.2	16.5	1.5	100.0(1232)
まったくあてはまらない	38.7	16.5	23.7	18.6	2.6	100.0(857)
D.K.,N.A.	20.0	33.3	13.3	13.3	20.0	100.0(15)
合計	54.2	15.1	14.2	14.6	2.0	100.0(3069)

表 4 - 13 当番の仕事をする×さぼるの意識と行動

単位：%

インボルブメント \ さぼる	してはいけない しない	してもよい しない	してはいけない する	してもよい する	D.K.,N.A.	合 計 (N)
あてはまる	74.8	5.3	13.3	3.7	2.9	100.0 (184)
ややあてはまる	68.2	5.1	19.0	4.9	2.8	100.0 (1326)
あまりあてはまらない	47.4	7.1	32.5	9.5	3.5	100.0 (745)
まったくあてはまらない	23.6	12.1	31.0	27.0	6.3	100.0 (174)
D.K.,N.A.	40.0	0.0	20.0	30.0	10.0	100.0 (10)
合 計	62.3	6.0	21.4	7.0	3.2	100.0 (3069)

表 4 - 14 宿題をいつもする×さぼるの意識と行動

単位：%

インボルブメント \ さぼる	してはいけない しない	してもよい しない	してはいけない する	してもよい する	D.K.,N.A.	合 計 (N)
あてはまる	75.4	5.8	10.9	3.6	4.3	100.0 (138)
ややあてはまる	76.4	3.7	13.8	3.4	2.7	100.0 (827)
あまりあてはまらない	64.1	4.8	22.6	5.8	2.7	100.0 (1232)
まったくあてはまらない	44.0	10.2	29.2	12.6	4.1	100.0 (857)
D.K.,N.A.	53.3	0.0	6.7	20.0	20.0	100.0 (15)
合 計	62.3	6.0	21.4	7.0	3.2	100.0 (3069)

積極的でない生徒に比べて、高校での経験率が約半分になる(「当番の仕事をする」21.4% 47.7%、「宿題をいつもする」23.9% 43.1%)。また、意識と行動に関する組み合わせでは、学校の活動への参加が最も積極的な生徒は、最も積極的でない生徒に比べて、「してはいけない/しない」の割合が多く(40.3% 12.1%、44.2% 18.3%)、「してもよい/する」の割合が少なくなる(17.2% 44.8%、18.8% 37.9%)。

このデータからは高校への親和性と学校(授業)をさぼる、髪を染めるの因果関係には言及できないが、高校への親和性は学校(授業)をさぼる、髪を染めるに影響しているといえる。

4.4 非行・問題行動と学業成績

トラッキング構造の影響が強い時期では、非行・問題行動と高校間の学業成績水準の格差との関係に焦点が当てられていた。しかし、非行・問題行動と高校格差との関係でみたように、現代高校生の非行・問題行動と高校間の学業成績水準の格差とのあいだには関係はみられない。だが、トラッキング構造の弱体化にともない、学校内における学業成績の影響が肥大すると考えられる。そこで、非行・問題行動と学校内の学業成績との関係をみている。

学校(授業)をさぼるについてみると、経験に関するパターンでは、学校内の学業成績が下がるほど、高校からの経験率、高校での経験率とも高くなる(表 4 - 15)。また、意識と行動に関する組み合わせでは、学校内の学業成績が下位である生徒のほうが、

表4 - 15 学校内の学業成績×さぼるの経験パターン

単位：%

学内成績 \ さぼる	経験なし	小・中学校のみ	高校入学以前から継続	高校から	D.K.,N.A.	合計(N)
下位	37.0	14.6	22.0	23.7	2.7	100.0 (486)
中の下	49.1	14.7	17.2	17.1	1.9	100.0 (733)
中位	57.1	15.3	13.4	12.6	1.7	100.0 (1011)
中の上	67.1	14.5	7.3	10.1	1.0	100.0 (614)
上位	62.6	16.7	9.4	7.9	3.4	100.0 (203)
D.K.,N.A.	36.4	22.7	18.2	9.1	13.6	100.0 (22)
合計	54.2	15.1	14.2	14.6	2.0	100.0 (3069)

表4 - 16 学校内の学業成績×さぼるの意識と行動

単位：%

学内成績 \ さぼる	してはいけない しない	してもよい しない	してはいけない する	してもよい する	D.K.,N.A.	合計(N)
下位	41.8	9.1	30.5	14.8	3.9	100.0 (486)
中の下	56.6	6.0	25.6	8.3	3.4	100.0 (733)
中位	66.9	4.8	20.9	4.6	2.8	100.0 (1011)
中の上	76.1	4.4	13.2	4.1	2.3	100.0 (614)
上位	69.0	9.4	13.8	3.4	4.4	100.0 (203)
D.K.,N.A.	45.5	9.1	9.1	18.2	18.2	100.0 (22)
合計	62.3	6.0	21.4	7.0	3.2	100.0 (3069)

「してはいけない/しない」の割合が少なく、「してはいけない/する」、または「してもよい/する」の割合が多くなる(表4 - 16)。

表は省略するが、髪を染めるにおいても、学校(授業)をさぼるとほぼ同じ傾向がみられる。経験に関するパターンでは、学校内の学業成績が下位の生徒は、学校内の学業成績が上位の生徒に比べて、高校での経験率が2倍以上になる(48.1% 22.0%)。また、意識と行動に関する組み合わせでは、学校内の学業成績が下位の生徒は、学校内の学業成績が上位の生徒に比べて、「してはいけない/しない」の割合が少なく(16.3% 35.5%)、「してもよい/する」の割合が多くなる(41.4% 18.7%)。

以上、学校内の学業成績が下位である生徒のほうが、学校(授業)をさぼる、髪を染めるを経験しており、学校内の学業成績が影響しているといえる。

4.5 非行・問題行動と青年文化

すでに述べたように、現代高校生は、かつての高校生に比べて、青年文化にコミットすることが可能となっている。そのため、青年文化が現代高校生の非行・問題行動に与える影響は肥大すると考えられる。そこで、非行・問題行動と青年文化との関係をみとみる。

学校(授業)をさぼるについてみると、経験に関するパターンでは、服装と髪型の流

行を気にする生徒のほうが、高校からの経験率、高校での経験率とも高くなる（表4 - 17・18）。また、意識と行動に関する組み合わせでは、服装や髪型の流行を気にする

表4 - 17 服の流行を気にする×さぼるの経験パターン

単位：%

青年文化	さぼる	経験なし	小・中学校のみ	高校入学以前から継続	高校から	D.K.,N.A.	合計(N)
あてはまる		45.7	15.3	16.3	20.2	2.4	100.0 (490)
ややあてはまる		53.9	15.3	14.3	15.2	1.2	100.0 (1621)
あまりあてはまらない		61.1	14.0	12.1	10.6	2.3	100.0 (737)
まったくあてはまらない		53.4	17.5	14.6	10.2	4.4	100.0 (260)
D.K.,N.A.		40.0	0.0	33.3	13.3	13.3	100.0 (15)
合計		54.2	15.1	14.2	14.6	2.0	100.0 (3069)

表4 - 18 髪型の流行を気にする×さぼるの経験パターン

単位：%

青年文化	さぼる	経験なし	小・中学校のみ	高校入学以前から継続	高校から	D.K.,N.A.	合計(N)
あてはまる		46.4	14.0	18.3	19.1	2.2	100.0 (278)
ややあてはまる		49.5	16.2	15.7	16.9	1.7	100.0 (1095)
あまりあてはまらない		58.9	13.7	12.2	13.5	1.7	100.0 (1201)
まったくあてはまらない		58.2	16.9	13.2	9.1	2.7	100.0 (486)
D.K.,N.A.		33.3	0.0	22.2	33.3	11.1	100.0 (9)
合計		54.2	15.1	14.2	14.6	2.0	100.0 (3069)

表4 - 19 服の流行を気にする×さぼるの意識と行動

単位：%

青年文化	髪を染める	してはいけない しない	してもよい しない	してはいけない する	してもよい する	D.K.,N.A.	合計(N)
あてはまる		54.7	5.3	26.9	9.4	3.7	100.0 (490)
ややあてはまる		62.2	5.9	22.0	7.2	2.7	100.0 (1621)
あまりあてはまらない		67.6	6.8	17.4	5.0	3.3	100.0 (737)
まったくあてはまらない		63.6	6.8	17.0	7.8	4.9	100.0 (260)
D.K.,N.A.		33.3	0.0	40.0	6.7	20.0	100.0 (15)
合計		62.3	6.0	21.4	7.0	3.2	100.0 (3069)

表4 - 20 髪型の流行を気にする×さぼるの意識と行動

単位：%

青年文化	さぼる	してはいけない しない	してもよい しない	してはいけない する	してもよい する	D.K.,N.A.	合計(N)
あてはまる		54.3	5.0	26.3	11.2	3.2	100.0 (278)
ややあてはまる		59.2	5.2	24.7	7.3	3.6	100.0 (1095)
あまりあてはまらない		65.3	6.3	19.7	5.7	2.9	100.0 (1201)
まったくあてはまらない		66.9	7.8	15.2	7.0	3.1	100.0 (486)
D.K.,N.A.		33.3	0.0	33.3	22.2	11.1	100.0 (9)
合計		62.3	6.0	21.4	7.0	3.2	100.0 (3069)

生徒のほうが、「してはいけない/しない」の割合が少なく、「してはいけない/する」の割合が多くなるが、「してもよい/する」の割合に変化はみられない(表4 - 19・表4 - 20)。

表は省略するが、髪を染めるにおいても、学校(授業)をさぼるとほぼ同じ傾向がみられる。経験に関するパターンでは、服装と髪型の流行を最も気にする生徒は、最も気にしない生徒に比べて、高校での経験率が2倍以上となる(「服装の流行を気にする」44.1% 15.1%、「髪型の流行を気にする」48.2% 21.2%)。また、意識と行動に関する組み合わせでは、服装と髪型の流行を最も気にする生徒は、最も気にしない生徒に比べて、「してはいけない/しない」の割合が少なく(18.4% 41.3%、16.2% 37.2%)、「してもよい/する」の割合が多くなる(39.2% 12.6%、42.1% 18.1%)。

学校文化と青年文化の境界が曖昧になりつつある状況下で、青年文化にコミットしている高校生は、学校(授業)をさぼる、髪を染めるを経験している傾向がみられる。

5. 「トラッキング・システム」の弱体化と高校教育の今後

多くの先行研究にみられるように、1970年代から1980年代にかけて、「高校格差」のなかで上位の高校に在学する高校生はいわば「勝者」、下位の高校に在学する高校生は「敗者」と自己認識する傾向があった。そして、「敗者」という自己認識、なおかつ将来的な地位に対する欲求不満状況から、下位の高校に在学する高校生が非行・問題行動に走ると考えられてきた。

しかし、これまでみてきたように、現代高校生においてはこうした状況は確実に変わりつつある。高校格差は、非行・問題行動にまったく影響を与えていない。きわめて過激・悪質な非行行為についてはともかく、多くの問題行動に関しては高校格差のなかのどんなランクの高校からも同じように生じている。もはや、現代高校生は、かならずしも「勝者」/「敗者」を認識することもないのかもしれない。そして、将来的な地位に対する欲求不満といった状態も少なくなってきているとも考えられる。つまり、現代高校生の非行・問題行動の経験に関するかぎり、トラッキング構造の弱体化というより、影響力が消滅したともいえる。

では、いったいどんな要因が浮かび上がってきているのか。ここで考えられるのは、これまで分析してきた3つの要因の影響である。まず1つは、高校生による高校への意味づけである。高校生が在学する自分の高校をどのように意識しているかという要因である。そうした高校に対する意味づけが、非行・問題行動を左右しているといってもよい。つまり、現代高校生は高校を「選抜・配分機関」としてよりも、「日常生活の場」として意識しはじめてきているのかもしれない。

その結果、高校生自身にとって自分の高校に愛着がもてるかどうか、教師に対する信頼性、ないしは居心地がいかどうかといったような主観的評価に規定されて、非行・問題行動が生じているということになる。したがって、かりに「進学高校」であったと

しても、学校への愛着や教師への信頼性がなければ、なんらかの問題行動に走る可能性がある。いっぽう、「非進学高校」であったとしても、学校への愛着や教師への信頼性があれば、問題行動に走ることはない。

第2に、学校内の学業成績の影響である。これまでみてきたように、トラッキング構造の影響力がなくなるにともなって、学校内の学業成績と非行・問題行動との結びつきが強まってきている。こうした学校内の学業成績という要因は、さきほどの自分の高校に対する愛着や居心地という問題と連動しているものともいえる。

第3に、青年文化の影響である。現代高校生は、かつての高校生に比べて、容易に青年文化にコミットできるようになった。学歴獲得という目標が喪失すればするほど、「いま頑張れば、将来いいことがある」ということより、「いまが楽しければそれでいい」という「享乐的」な青年文化の影響を受けやすい。それだけでも、現代高校生の非行・問題行動に与える青年文化の影響が肥大していることはまちがいない。

これまで分析を行ってきた非行・問題行動に象徴されるように、いまや多くの高校生の意識・行動を規定している要因は高校格差ではない。まちががなく、それぞれの「学校」である。それぞれの高校がどんな教育実践をするのか、生徒たちになにを与えられるのか。「高校格差」という枠組みがあまりに大きかったかつてと比べて、いま高校は独自の教育実践による直接的な教育効果が期待できる。だからといって、高校のなかに青年文化がどんどん侵略してきているいま、1980年代の高校生を「管理」するような指導方針では、かえってかれらを学校から離脱させてしまうことにもなりかねない。

「トラッキング・システム」が「ゆるやかな構造」、ないしは弱体化したという事実は、それぞれの高校が独自の「学校」としての教育を取り戻せる絶好のチャンスである。そして、その中心部分に位置づくものが、高校生にとって「高校」がどれだけ意味ある存在となるかということである。それを基本にして、高校という「学校」をそれぞれの高校がどう作っていくのかという「学校づくり」の発想が、いま強く求められている。

付記

執筆分担については、第1章および第5章が秦、第2章、第3章1節と2節、および第4章は片山、第3章3節と4節を西田が担当した。

註

- 1) 非行・問題行動を小学校で経験し、中学校では経験していないが、高校から再度経験するパターンが少数ながら存在したが、ここでは小学校である非行・問題行為を経験し、中・高校まで継続するパターンに含める。
- 2) このパターンには、小学校のみで経験するパターン、中学校のみで経験するパターン、小学校で経

験し、中学校まで継続するパターンの3パターンが含まれている。

参考文献

- 藤田英典（1980）「進路選択のメカニズム」山村健・天野郁夫編『青年期の進路選択 高学歴時代の自立の条件』有斐閣選書 101 - 129頁
- 秦 政春（1984）「現代の非行・問題行動と学校教育病理」『教育社会学研究』第39集 59 - 76頁
（2000）「子どもたちの規範意識と非行・問題行動」『大阪大学人間科学部紀要』第26巻 125 - 153頁
- 樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・苅谷剛彦編著（2000）『高校生文化と進路形成の変容』学事出版
- 耳塚寛明（1980）「生徒文化の分化に関する研究」『教育社会学研究』第35集 111 - 122頁
- 尾嶋史章（2001）『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房
- Thomas P. Rohlen（1983=1988）友田泰正訳『日本の高校 成功と代償』サイマル出版
- Travis Hirschi（1969=1995）森田洋司・清水新二監訳『非行の原因 家庭・学校・社会のつながりを求めて』文化書房博文社
- 米川英樹（1978）「高校における生徒下位文化の諸類型」『大阪大学人間科学部紀要』第4巻 185 - 208頁

‘High School’ for Senior High School Students in Modern Society

Masaharu HATA, Yuki KATAYAMA and Akiko NISHIDA

It was effective to analyze behavioral pattern of senior high school students from the viewpoint of ‘tracking system’ in 1970s and 1980s.

But, the influence of ‘tracking system’ on senior high school students would be weaker and weaker under the recent situation that the ratio of going on to a university is rising. Then, what factors will have a effect on senior high school students?

Thus, the purpose of this paper is to explore the change of present-day senior high school students through delinquent and at-risk behaviors. Analyzing this, there are two stand points ; 1) ‘the experiential pattern’ and 2) ‘the combinations of norm consciousness and action’.

The major findings are summarized as follows :

- (1) The influence of ‘tracking system’ on slight delinquent and at-risk behaviors is lost.
- (2) Instead, the affection for the senior high school (concretely, attachment to teachers and involvement in school activities it’s application of Bond theory) and the academic record of senior high school have a great effect on delinquent and at-risk behaviors.
- (3) In addition, youth culture exercises a great influence on delinquent and at-risk behaviors.